

第三十八回

宗像マラソン大会



あいにくの雨模様となつた二月二十一日(日)恒例の第十八回宗像マラソン大会...

- 社正面大鳥居前をスタート、大駐車場脇ゴールのコースで競われた。午前十時、健康マラソンの部参加の老若男女約二百名が、号砲と共に勢よくスタートして競技を開始。

- 一位 斎藤 隆法(中関高) 15分40秒
二位 徳淵 諭(飯塚高) 15分42秒
三位 三重野博文(飯塚高) 15分45秒

水ぬるむ 若草萌ゆる土堤

「釣川の水が美しくなり、節分の頃を境いとして、宗像地方には春の足音が感じられる様になる。」

「更なる二〇年に向けて」

(宗)宗像青年会議所 理事長 西山末廣



一九九五年、年明け早々新聞・TV等で、承知の通り阪神地域を大きな地震が襲いました。戦後最大の災害となった阪神大震災は被災地に深い傷跡を残し、今なお回復の見通しがつきません。...

この長き歴史の中で、諸先輩方は、各種の事業を展開し輝かしい実績を構築してこられました。...

この記念事業には、宗像市の四年生から六年生の子どもたち三〇〇名の宗像の地域を担うであろう子供たちにとって、このキャンプに参加をし、「自然の優しさ、厳しさ」に触れたことは、かけがえのない経験であり、財産となったこととして、

平成七年度役員

- 理事長 西山 末廣
専務理事 石田和代
常任理事 西山 茂文
事務局長 花田 敬章
総務・広報委員長 伊東 浩明

- 出光石油開発代表取締役社長行方洋一氏
出光石油代表取締役社長長谷川博彦氏
出光石油代表取締役社長長谷川博彦氏

宗像大社歌会
俳句作品集 三三三

ひかりヶ丘 南 萬里
麦の芽には暁照の日の眩し

藤沢 井上 玄洋
注連飾り鈍ゆる日光太郎杉

福岡中央 力丸 玄風
あらためて明治の男初鏡

日里 花田いつ枝
入字の夢かぐりますランドセル

自由ヶ丘 細川 絹子
かたごとの交る挨拶初電話

若松 高橋 忠實
救急車音のみ高き霜夜かな

福岡森 清
雪積んでからの紅牙ゆ寒椿

若松 井手 清隆
寒林の風切れ目なし稚児落し



(続) 浜の奇物

93



いししいただし

昨年夏のおわり、ぶらり
と歩いた神戸の街、人工島
ポートアイランド、そして
明石海峡。まさか四ヶ月後
に大地震が起るとは日本人
の多くは思ってもみなかっ
たことである。東海以北
三陸、北海道は地震が頻発
していたから、むしろそち
らの方に注意していたので
ある。

今迄四日本は地震に余り
縁がないと思っていたが日
本列島はまさに地震列島で
あり、どこでも起ることを
今度の阪神大震災で思い知
らされたのである。それに
しても恐ろしい。鉄筋ビル
が倒れ、高速道路が落ち、
火災。

これを機に過去の記録を
調べ見たら、日本書紀天
武天皇七年(六七八)に大
地震が起っている。記述も
具体的だ。「十二月に、筑
紫国で大きな地震があった。
地が広さ、王、長さ三千余
丈にわたって裂け、百姓
(おみたち)の家がいたる
ところの村々で数多く
倒壊した。この時、岡の上
にあったある百姓の家は、
地震の夜に岡が崩れ、違っ
た場所に動いてしまった。
しかし家は無事でこれな
かった。その家は、岡が崩
れ、家が動いたことに
気がつかず、夜が明けてか
らそれを知って、たいへん
びっくりした」と。日本
書紀下、井上光見、中央
公論社昭和六三年、大地震
が動いている。この時の地震
の規模はマグニチュード六
・五から七・五という推定で
ある。大地震である。そし
てこの時の地震が久留米に
ある筑後国府跡の大津登掘
地点で、液状化現象が見
られている。出土遺物から六
七八年の大地震の記録とも
一致するといふ。

宗像市の高地原遺跡でも
地震の際の地割れが発掘さ
れているし、津屋崎町のゴ
ルフ場造成地の古墳の墳
れるという事、島の風習
として墨守されている。古
来彼等には神の子としての
厳しい、禁忌が守られてい
る。生理中の子女は昔は別
室中に独り身を慎んで絶え
えられ、彼等は、その際
家人とは全々別室を養育を
し、且独り別室で食べると
いう程であった云々。島民の
結婚習俗にも一風変わった
ものがある。

島の家々には殆ど戸締り
の必要はない。年頃の青年
に意中の相娘が物色せよと
、先ず媒酌人によって彼女の
真意が堂々と叩かれ、そし
て後初めて親許の交渉が
開かれる。ここに未だ家計
を助くべき境遇に置かれた
娘の場合には、例え婚姻奉
式後と雖も、時々出稼いで
実家に仕送りをしてなければ
ならない。

故に若直
ちに彼女の
総てを得て
同居せんと
するならば、
夫は一定期
中の収入予
定額を算出
して、一時
に彼女の親
許に支払わ
なければな
らなかつた。
此の他島
に見るべき
ものは、神
崎に在る
「安海燈籠」の威容と、安
昌院の老樹下に眠る安部宗
任の墓、そして宗像の大神
が山へ往來に際して遺
都人士の来訪繁く、漸く島
の習俗に变革が起っている。

岩陰祭祀に供えられた
品々
沖ノ島の祭祀で遺物若
陰にある祭りは、六十七世
紀代の時期に比定されてい
る。
この形態の祭場の中でも
背中合せに構成されている
7号遺跡と8号遺跡では、
多量の奉獻品で賑わをみせ
ている。特に、このそ
の主要な出土遺物は馬具類
であり、武器と武具の類で
あった。
またこの二
つの祭場へ奉
獻された品々
は、特に豪華
であり、優美
なよそおいを
している。
馬具類は馬
への裝飾品が
ほとんどであ
る。ここに列
記していく。
△金銅製品
の香葉(心葉
形香葉・棘葉
形香葉・剣菱
形香葉)
△歩掛付雲
珠(四本枝形・
五本枝形・六
本本枝形・八本
本枝形)
△辻金具
△透彫帯金具
△金象嵌金具
等の多量の金銅製馬具類で
ある。
他にササン朝ベルシヤ製
のガラスで作られた純金製
朝鮮新羅で作られた純金製
指輪も供えられている。
そのほとんどの物が朝鮮
半島を統一して、半島を一
つの国とした、統一古新羅

宗像むかしばなし
筑前大島 珍談奇談

大島の北岸、岩瀬に当社
沖津宮遣拜所がある。古来
沖ノ島に渡るものは、必ず
此処で七日間の濯禊をなし、
しかるのち渡海におよんだ
と言ふ。

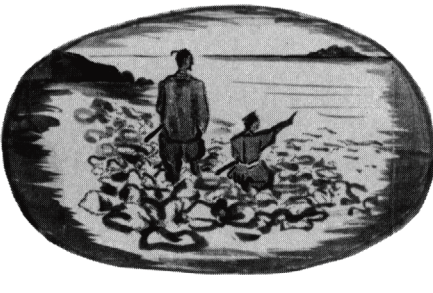
この浜には、陰陽石と称
して、奇怪な様子の姿をな
す手頃の石が、浜辺にゴロ
ゴロと転がっている。
彼の徳川期の、国学者鈴木
木重胤も、之には余程面喰
らったと見えて「筑紫再考」
にこう書いている。
安政四年六月、午後より
岩瀬に至る、皆々相従つ、
「中略」心ゆくまで拝み奉

りて浜邊をめぐりけるに、
自然の夫妻石を得たるもお
かし。
大神の御床あはし、中
ツ宮
妹背の御形あわれにけ
り
○十月は「神無月」とい
れ都下の各地で行われる神
送と神待ちに、す面白風
習がある。
宗像三女神も亦出雲の国
に御出ましにならぬと信
じられ、九月十日を期して
大島村の青年たちは各郷村
の祠堂に集まり、夜を徹し
て神を送るのである。かく

して三女神は縁結の神た
る出雲の神様に、良縁の御
相談をして戴くといふ、虫
のよけ然し類々ましい発想
であった。
愈々十一月一日の神の御
帰国を前に、前夜から再び
祠堂に相集つた青年達は、
太鼓を打鳴らして、徹夜の
「神待」をするのである。
此の夜用意された攝殿の中
には、ショウガを入れた三
個が混ぜられてあつて、若
し之に当たつた者は、願ひ叶
うて良縁の神恩を忝し得
たるものとして、夫々酒一
升宛を、同じ振舞させら

る。その前に、前夜から再び
祠堂に相集つた青年達は、
太鼓を打鳴らして、徹夜の
「神待」をするのである。
此の夜用意された攝殿の中
には、ショウガを入れた三
個が混ぜられてあつて、若
し之に当たつた者は、願ひ叶
うて良縁の神恩を忝し得
たるものとして、夫々酒一
升宛を、同じ振舞させら

る。その前に、前夜から再び
祠堂に相集つた青年達は、
太鼓を打鳴らして、徹夜の
「神待」をするのである。
此の夜用意された攝殿の中
には、ショウガを入れた三
個が混ぜられてあつて、若
し之に当たつた者は、願ひ叶
うて良縁の神恩を忝し得
たるものとして、夫々酒一
升宛を、同じ振舞させら



荒潮に跳る天下の珍珠、
鯛鮓の料理と、月夜の浜に
咽び泣く磯の千鳥に、近來
都人士の来訪繁く、漸く島
の習俗に变革が起っている。

の国で作られて、大和の国
へと將來されてきた品々々
である。
沖ノ島の岩陰祭祀の時期
が、丁度島々を統一して律
令国家を形成し、上昇気運
に乗っていた時でもあり、
ここで大和朝廷は、海を間
にはさんだ隣国新羅の国と
外交交渉を行っていた時代
といえる。
五十七年 筑紫国造登井
の乱
五十六年 任那日本府滅
亡

六五五年 胸形若徳善の
天皇の娘天武
天皇后宮に入
り高市皇子
誕生
六六三年 白村江の戦
六六四年 筑紫に水城を
築く
六七二年 壬申の乱
等と以上別記して、如く、
内外でのあつた激しい激動
の社会であった。外交使節
を派遣した
り、任那日
本府滅亡や
白村江の戦
などをみる
ように、新
羅との戦闘
もは戦闘
くくりかえ
し行われて
いた。
岩陰祭祀
の奉獻品の
ほとんどが、
朝鮮新羅製
の品々であ
る。社会の
動きと共に
多量な品が
半島より流
入してきた
か、贈り物
として大量
に運ばれてきたかは定か
ではないが、沖ノ島そのも
のが当時の国際航路「海雲進
の中心としての標識の役目
だけではなく、外交交渉の
成功を祈念した国を上げて
の国家的な大祭祀を行った
所である。
〈松〉



(12)